

破壊すると血糖値低下

体内の細胞間で情報を伝達する分子（ATP）を分泌させる特定のタンパク質を破壊すると、インスリンの効果が高まり、血糖値が下がることを、岡山大と九州大などの研究グループがマウスを使った実験で突き止めた。糖尿病の新しい治療薬の開発につながる成果として期待され、21日付の英科学誌サイエンティフィック・リポーツ電子版に発表した。

特定のタンパク質は、研究グループが2008年に発見した「VNUT（ブイナット）」。細胞内の小胞にATPを輸送し、細胞からのATP分泌に重要な役割を果たしている。

グループによると、VNUT遺伝子を破壊したマウスで実験したところ、ATPの分泌がなくなり、インスリンの量が上昇、血糖値が低下した。インスリン分泌を抑制する情報が伝達されなくなったためと考えられ、マウスにも低血糖などの副作用は確認されなかったという。

グループは、VNUTの働きを阻害する

糖尿病治療薬開発に期待

ことでインスリンの分泌を促し、血糖値をコントロールできる可能性がある」とみている。会見した岡山大学院医歯薬学総合研究科の表弘志准教授（生体膜機能生化学）は「体への負担が少ない新薬の開発が期待できる。阻害物質として使える化合物の探索を進めたい」と話した。（伊丹友香）



研究成果を発表する表准教授＝岡山大